

潮流

レインボーマン「M作戦」から見る異次元緩和

調査第二部副部長 南 武志

「おふくろさん」の作詞家としても知られる故川内康範氏は、1970年代前半のテレビ番組「レインボーマン」の原作者でもある。そこでは、日本人抹殺を目論むミスターK率いる「死ね死ね団」と戦うレインボーマンことヤマトタケシの活躍が描かれている。基本的に子供向けの番組であり、設定は荒唐無稽ではあるが、現実的な内容も一部含まれていたりする。ミスターKは日本を破滅に追い込むために様々な策を講じるが、そのうちの「M作戦」では偽札を大量に印刷し、それを新興宗教「御多福会」を使って全国にばらまくことでハイパーインフレを引き起こし、日本経済を混乱させる。レインボーマンは何とか偽札工場を破壊するが、人心は荒み、暴動が頻発、ミスターKの思う壺になりかける。が、レインボーマンの要請を受けた政府による預金封鎖と食料の無償配布などの経済対策によって何とか収拾することができるのである。

実は、偽札を使って経済を混乱させるという作戦自体は決して空想上の話ではない。戦争中にはよくある話で、第二次世界大戦当時でも使われた戦術の一つである。日本では「杉工作」として、登戸研究所（正式名称は第9陸軍技術研究所、現在の明治大学生田キャンパスで、構内には平和教育登戸研究所資料館がある）で印刷した30億円近い偽札を中国でばらまいた。また、ナチス・ドイツでも1億3,200万ポンド分のポンド紙幣を贋造・流通させる「ベルンハルト作戦」を実施、戦後の英国経済の混乱を招いたとされる。現在でも紙幣偽造は後を絶たず、特に国際通貨ドルの偽造は多い。米国では高額紙幣の受け取りが拒否されることも少なくない。10月8日から最先端の偽造防止技術を取り入れた新100ドル札が流通し始めるそうだが、いずれその技術を克服し、精巧な偽札が出てくる可能性は否定できない。

さて、「M作戦」などの偽札作戦を経済学的に考察すると、「マネー拡大⇒インフレ」ということを前提とした戦術であることは言うまでもない。つまりは、過剰流動性の発生はいずれインフレを引き起こされる、ということ了我々人類は経験的に学んでいる、ということであろう。昨今、百貨店などでは高額な宝飾品の売れ行きが好調とされるなど、家計のマインドが好転している。また、大型経済対策に基づく公共事業も堅調だ。海外経済の底堅さや円安効果によって、輸出も増勢が強まると思われる。このように需要が拡大するなかで、日銀によって大量に供給されたマネー（この点は紹介した「偽札作戦」とは決定的に異なる）は、いずれ物価を上昇させ、ひいては所得拡大につながるものと思われる。もちろん、度が過ぎて、「インフレ加速⇒経済混乱」という領域に至る手前で緩和策を止めなければならないのは言うまでもない。

一方、早く止めれば、将来デフレに逆戻りする可能性が残るなど、「出口」については非常に繊細な判断が必要である。出口戦略の際、何も混乱がなく、きれいに着地できるかどうか、現時点では何とも言えない。とはいえ、われわれ有権者は、昨年末の衆院選・今夏の参院選で「リスクはあっても、デフレ脱却や成長底上げに向けてもがき続ける」ことを選択したわけであり、その行く末を見届ける責任がある。アベクロミクスは大いなる実験ではあるが、それが成功裏に終わることを心から願っている。